

社会文化誌試論—(上)—

— 民衆の表現活動と了解の方法 —

A Seeking for the Methodology of Sociography

—On the interpretive approach to the Expressive Actions among Grass Roots—

米 田 頼 司

Yoritsugu YONEDA

2004年10月12日受理

〔目次〕

1. はじめに
2. 事実性と事実調査
 - 1) 題名
 - 2) 事象
 - 3) 作者

(以上、本号)

(以下、次号)

3. 表現された世界
4. 再現性と想起性
5. 結語—社会文化誌とその方法について—

1. はじめに

民衆の表現活動は、芸術家などの表現の専門家による活動とその造形性に対する議論に比べて、それ自体が主題化されて研究されることは決して多くない。しかし、表現活動は、人間性の本質に関わる不可欠な要素として人間のあらゆる活動や行為に付随するものである。民衆の表現活動それ自体が主題に据えられることが少ないとすれば、やはり問題と言わざるを得ない。

祝祭は非日常的な日常として、民衆の独自に様式化され特殊化された表現活動の場となるし、多少とも非日常的な性格を有する社会的磁場に生起する社会運動における諸活動についても、やはり独自な表現性を帯びたものになる。更には、日常的な自らの楽しみや習い事、あるいはまた近代以降の学校教育の場などにおける表現活動に至るまで、表現の専門家ではない民衆による表現世界は、生きる活動としての生活世界にむしろ充満している。必ずしも造形性という点では、見るべきものがないような場合でも生活世界に満ち溢れる表現活動へのアプローチがあってしかるべきではないか。

しかし、絵画分野では、「造形性」への関心の集中から「絵を読む」ということが軽んぜられてきたという。

「近代以降、絵画分野では常に造形性が重んぜられてきた。造形だけが絵画の全てであるかのように。…情感とか感傷とか文学性といったものが、軽蔑される傾向にあった。…ことに現代美術は『造形』を喧しくいう、美は『造形』で成り立つとばかりに。『絵を読む』などということは邪道になったのである。伝統的な東洋画、いわゆる物語絵、歴史画、文人画、美人画等々のジャンルは古いものとみなされてきた…。」(文献：塩川京子1996年、1頁)

塩川京子氏のこのような評言は、程度の違いはあれ表現の世界全体にも当てはまるものではないだろうか。ことに民衆の表現活動については、芸術家(専門家)による「造形性」を主題とする観点からは、常に周辺に置かれるものであったのではないか。

今日、民衆による表現活動が社会的・文化的事象として着目されるべきものであるということに異論を唱えるものはまずないであろう。しかし問題はどのような意味において着眼されるのかということにある。専門家の「造形性」を主題にした議論の周辺に配置され、その必要に応じて「引用」されるという意味で植民地にされているのであれば、あるいは何かの社会的・文化的事実や事態が客観的・実証的に説明される際の補足材料として援用されるに止まるというのであれば、

たとえ必要不可欠なものとされていたとしても、民衆の表現活動それ自体は主題化されることはなく、従ってまたその研究に独自の方法とアプローチが用意されるということにもならないであろう。民衆の表現活動は、それ自体が主題として解明されるべきテーマとなり、了解されるべき独自の社会的・文化的事象として捉えられねばならないというのが本稿における立場であるが、このようなテーマの独自化・自立化にはそれに相応するアプローチと方法とが要求されることとなる。

民俗学的アプローチは、自ずと民衆の表現活動に目を向けるものとなるが、ある種の事実学の範囲内に滞留し、あたかも“死せる民俗”の標本採集の如き作業に終わるのであれば、実り豊かな成果を期待することはできない。生きられた民俗の消滅という歴史的事態にも規定されることになるが、生きられた民俗への内的回路を備えたものでなければ、如何なる意味においても民衆の表現世界へのアプローチは失敗に帰することになる。民俗学的アプローチ、更に社会文化誌的アプローチは、日々を生きる活動としての生活世界の内在へと通じる回路を用意するものでなければならず、生きられた民衆の表現世界への通路を切り開くものでなければならないであろう。

社会文化誌には、誌 (graphy) として私たちの生活の事実や実態のあるがままが記述されねばならないということが要請されることになるが、このことは、生活の内在的意味世界の了解という課題を排除するものでも、遠ざけるものでもない。むしろ、社会文化誌の究極の意義は、世界を生きる私たち自身の自己了解という困難な課題に立ち向かうところに存するものであろう。言うまでもなく、歴史的な過去において生きられた世界の歴史に自己限定することなく、まさに生きられる生活世界そのものに横溢する表現活動に焦点を当て、その内的了解への通路を切り開くという課題は、社会文化誌の最も基本的なテーマとなるであろう。民衆の心情、心性へのアプローチは如何にして可能かという、繰り返されてきた問いが本稿においても再提起されることになる。

本稿において試みられる社会文化誌的アプローチは、民衆の精神史研究に位置付けることができるであろうが、表現を主題にした検討は、生きられた生活世界の内的了解や理解に至るのにどのような通路を必要とするのか、あるいは表現への共感という、言わば万人に開かれた端的で実存的な内的呼応から切り開かれる了解の通路とはどのようなものであるのか、更には、表現という社会的・文化的事象の内的了解を経ることで生まれる想起性や再現性とは如何なるものであり得るのか、と言ったことが問い進められることになる。これらの問いは、自己了解を理念とする社会文化誌の意義と可能性を論ずる際に基本的な課題群を構成しているであろう。本稿はこうした課題群に対するさ

さやかな解答の試みである。

2. 事実性と事実調査

社会文化誌的アプローチの対象になる社会的・文化的事象は、無数に存在する。私たちの生活の事実と実態の全て、その過去も現在もその全てが対象になり得る。私たちが社会文化誌的なテーマとしてとらえ、これに検討を加え、その内在的意味の世界へと入り込んでゆくためには、否応なくその対象となるものを選び取らねばならない。その際に何らかの方法や原則が設けられる必要があるのだろうか。あるいはまた、優先されるべきものがあるとすればそれはどのようなものなのか。私たちにとって問題となるのは、素材を探し出すことではなく、むしろ素材を如何に選び取るのかということになろう。

本稿で議論の俎上に乗せる一巻の近世の絵巻物がある。この絵巻物が、本稿で試みられる社会文化誌的アプローチと方法に従って了解されるべき社会的・文化的事象として取り上げられるのであるが、この絵巻物は、ジャンルとしては風俗画の典型的なものであり、その魅力を存分に備えたものである。私がこの絵巻物に関心を持つことになったその第一理由は、絵画史研究や歴史研究における意義ということからではなく、この絵巻物に描かれているもの、その表現に引かれるものがあったからであり、共感するものがあったからである。

私のこの絵巻物に対する社会文化誌的関心は端的に言えば実存的契機によって呼び起こされたものであるが、本稿で試みられる社会文化誌的アプローチにおける最初の課題は、事実性に関わるものである。まず、究明されるべき課題として設定されるのはこの絵巻物の事実性に関わる事柄であり、これが本稿で試みられる社会文化誌の方法でもある。言うならば、この絵巻物の素性に関する事実調査をアプローチの最初に置くという訳である。繰り返すまでもなく、この事実性の究明は本稿の目的ではない。事実性の究明は、この絵巻物の社会文化誌的解明・了解のためのアプローチの最初におかれるべきものとして、言わば本稿における議論を終わらせるためのものではなく、始めるためのものとしてある。事実性に関わる究明は、理解と了解の試みを終わらせるのではなく、むしろ理解と了解とをより豊かに進めるためのものである。社会文化誌的アプローチでは、事実性の究明は主観世界を終息させるのではなく、内的に生きられた生活世界を甦らせるものでなければならない^(註1)。

1) 題名

全ての絵に名前が付けられているわけではない。と

くに素人が日常的に描くものには、名前は付けられないことが多い。題名のない絵は、むしろ普通に絵を描くという表現行動においては自然でさえある。しかし、この試論で取り上げる近世の絵巻物には、題が付けられている。この絵巻物は、現在ニューヨークのパブリックライブラリ（ニューヨーク市立図書館：以下NPLと略す）にスペンサーコレクションの中の一つとして収蔵されている。NPLのカタログには、「Wakanoura Gosairei Motituki Odori Gyoursu Zukan (The Procession of Pounding Dances at the Festival of Wakanoura) f.hf. of 19c 1scr」との記載がなされている。しかし、絵巻物の巻首に『和歌御祭礼渡り物之内餅搗踊之図』との題が記されており、“Wakanoura Gosairei”とされているのは、明らかな過ちである。元々巻首に記されているとおりに、“Waka Gosairei”でなければならない。現在は、和歌祭と通称されるようになってきているが、紀州藩・藩政期の正式な呼び方は“和歌御宮の御祭礼”である。“和歌御宮”の“御宮”は紀州東照宮のことであり“和歌”は“御宮”の所在する当時の和歌村を意味したものと考えられる。“和歌御宮の御祭礼”は、“紀州東照宮の御祭礼”という意味であり、それが正式の呼び方であった。従ってまた、この正式な呼び方は、紀州東照宮が家康と藩祖である頼宣を祀ったものであることを考えれば明らかなとおり、祭礼が紀州藩の公式の藩祭であったことをも意味している。巻首の題辞に“和歌御祭礼”とあるのは、“御宮”が略されて通称化されていたと思われる呼称が使用されたものであろう。明治以降のものと思われる和歌祭という通称^(註2)は、この“和歌御祭礼”から更に転じたものと思われるが、カタログにあるように“Wakanoura Gosairei”とは決して言われることはない。赤人の万葉歌に詠まれた故地として文化史上に名高い和歌の浦に対する連想から生じた過ちであろう。和歌祭は、和歌の浦で行われる祭礼ではあったが、歌枕である和歌の浦の祭礼ではない。この点、反町茂雄氏は、スペンサーコレクションとして収蔵されている日本絵入本及絵本の目録を編集した書物の中でくだんの絵巻物にとくに注釈を付しているのであるが、「巻首に『和歌御祭礼渡り物之内餅搗踊之図』とある。和歌の2字の下に、浦の字を脱したものであろう」（文献：反町茂雄1978年、60頁）と述べており、カタログの過ちを追認するものになっている。私たちがその内在的理解をテーマとするこの絵巻物は、恐らくはその誕生の折に授けられたであろう元々の名前ではなく、後世の鑑定人や収集家により誤って与えられた名前前でこれまで存在し続けてきたのである。

この絵巻物は、私に対してもそうであるように、人を魅了するところがあるのであろう。反町茂雄氏によれば、この絵巻物の一部分が着色の絵葉書としてNPLで販売されていたとのことである^(註3)。その収蔵品が嚴

選されたものであるとの定評があるスペンサーコレクションの中でも評価がたかく、近年においても大英博物館と日本協会とが主催した展覧会：Kazari—Decoration and Display in Japan（2002年）に出品展示されている（文献：Nicole Coolidge Rousmaniere ed. 2002, 294～295pp.参照）。しかし、この多くの人を魅了してきたであろう絵巻物は、その巻首に記された本来の題名ではなく、和歌祭（和歌御祭礼）に対する基本知識のあるものであれば決して犯すことのないはずの誤った題名が付されて紹介されてきたのである。このことはこの絵巻物が和歌祭に関する基本知識をもたなかった人たちによって鑑識されて、処遇されてきたことを意味しているであろう。しかし、この絵巻物の事実性に関わる問題は、その題名をめぐる問題に止まることなく、実は、はるかに根本的な次元にまで究明の目が向けられねばならないものになっている。この絵巻物が最初に誕生した際に授けられたであろう本来の題名とそこに描かれているものが果たして一致しているものかどうかという、この絵巻物の誕生と存在の基底部からその事実性の究明がなされなければならないのである。

2) 事象

題名とそのもとに描かれている事象とは通常一致するはずのものである。しかし、この絵巻物の場合、巻首に記された題辞に照らして一致しないものが描かれている。

この絵巻物については、これまで和歌祭行列の一部分を描いたものと考えられ、NPLのカタログにもそのように紹介されてきた。最近の研究でも和歌祭行列の一部分を描いたものであることを前提として絵画分析が行われ、描かれている和歌祭の挙行されたと考えられる時期の特定などが行われている。私がこの絵巻物の存在を知ることになったKazuko Morohashi氏のロンドン大学・大学院修士論文^(註4)（文献：Kazuko Morohashi 2001）がそれであり、和歌山城下研究及び和歌祭研究の第一人者である三尾功氏の『和歌山地方史研究』に発表された二つの論文^(註5)（文献：三尾功2003年A、2003年B）がそれである。

ここには、全く対照的な二つの行列がそれぞれに生き生きと描かれているが、その対照の妙こそはこの絵巻物の最も著しい特徴となっている。絵巻物の前半に描かれているのは、和歌祭の代表的な練り物の一つである「餅搗き踊り」（後掲図Ⅰ）である。後半部分には「砂持ち」（後掲図Ⅱ）が描かれている。本稿のテーマである表現された世界に関する意味分析などについては後に詳述するとして、これら二つの行列の内、確かに前半の「餅搗き踊り」は見事に振り付けされ華やかに芸能化された練り物として描かれており、この絵巻物

の巻首に題名として「和歌御祭礼渡り物之内餅搗踊之図」とあるのとぴたりと一致している。しかし、これとは全く対照的に渾然とした祝祭の活気にあふれる後半の「砂持ち」は、アナキーな様相をも潜在させた行列として描かれており、藩祭として厳粛に執り行われたとされる“和歌御祭礼”の練り物とするには、躊躇せざるを得ないものになっている。

このような意識をもって少し詳しく見ると「砂持ち」に描かれている背景は、和歌祭が行われる和歌の浦の景観とは大きく異なるように見える。この絵巻物が描かれたのは何時頃のことであるのか？「餅搗き踊り」が和歌祭の練り物であることは明白であるが、描かれているような「砂持ち」が和歌祭の練り物として行われるようなことはあったのであろうか？あったとすればそれは何時行われた和歌祭のものであるのか？この絵巻物の素性を明らかにしようとする限りは不可避であるこれらの問いに対する解答が、改めて求められねばならないものになっている。

「餅搗き踊り」が描かれているものでは、17世紀の和歌祭を描いた「東照社縁起絵巻」(1646年)と「海善寺屏風絵」(1665年)がよく知られたものである。また『紀伊国名所図会』(1811年)には19世紀の和歌祭が描かれている。「東照社縁起絵巻」と「海善寺屏風絵」には初期の和歌祭の「餅搗き踊り」が描かれており、『紀伊国名所図会』には19世紀以降の和歌祭の「餅搗き踊り」が描かれている訳であるが、これらとスペンサーコレクションの絵巻物に描かれた「餅搗き踊り」とを比較してみても判然とするのは、絵巻物に描かれた「餅搗き踊り」と初期の和歌祭のものとの明白な相違と『紀伊国名所図会』に描かれたものとの近似である(後掲図III参照)。初期の「手合わせ」は一人であり、髪型も垂髪(「東照社縁起絵巻」)と根結の垂髪(「海善寺屏風絵」)であるが、スペンサーコレクションの絵巻物と『紀伊国名所図会』では二人であり、髪型も結髪で江戸後期のものと思われる。

『紀伊国名所図会』^(註6)では「餅搗き踊り」に対して次のような文が記されている。

「夫餅の事は、神代のむかしより始りて、先哲もいまだつまびらかならず。されど世に持はやすこと久しく、造酒奉る神々の中にも、下戸なる神は多く納受あらんかし。しかるに此餅は、搗きて神供に捧ぐるにもなく、丸めて市にひさぐにもあらず。五風十雨に濕ふ民の太平樂を模して、雀躍たる姿に鳴物の拍子を合わせ、嬋娟たる鬢づら、拗柳たる黛にはあらねど、ふつかならざる美男子に、紅粉の粧を借り、是を手合の婦として、八人の杵持つ男、都て餅花・團扇太鼓の役々迄、おの／＼所作事を盡せば、拍子にをかしみを催させ、踊に翳の會をなさしむ。見る所一として興ならぬはなく、戸ざ々ぬ御代の有様、いと面白き優舞なり。」(文献：高市志友編『紀伊国名所図会(一)』314頁)

実際に「餅搗き踊り」を目の当たりにして作文されたようにさえ思えるこの一文は、絵も小さく幾分か単調なところのある『紀伊国名所図会』の行列図中の「餅搗き踊り」よりも、スペンサーコレクションの絵巻物に描かれた「餅搗き踊り」により相応しいものに思われる。『紀伊国名所図会』には先の文に続いて、「因に曰く、此をどり中絶なりしを、寛政十二年申年、若山青霞堂なるもの、其舊を正し、新たに一二の作手をくはへ、これを再興す。広瀬八町より此役をつとむる。」とあり、スペンサーコレクションに描かれた「餅搗き踊り」こそは、寛政十二年に再興された「餅搗き踊り」を記録すべく、忠実に描かれたものではあるまいか、という想念が呼び起こされる。この絵巻物の制作動機ということに思考をめぐらせれば、そのような推理も十分に成り立ち得る。

この絵巻物が描かれた時期を寛政十二年(1800年)乃至そのごく近いところのものとする仮説を立てることができるとすれば、後半部分に描かれている「砂持ち」についてもほぼ同時期に描かれたものではないかという推理が当然の如くに導き出されてくる。

高橋克伸氏の論文(文献：高橋克伸1996年)には、享和元年(1801年)に行われた日前宮の「砂持ち」を描いた「日前宮砂持絵図」の存在が紹介されている。私の見当は、スペンサーコレクションの絵巻物に描かれた「砂持ち」は、まさしくこの享和元年の「砂持ち」を描いたものではないか、というものであったが、高橋克伸氏の協力を得て「日前宮砂持絵図」とスペンサーコレクションの絵巻物に描かれた「砂持ち」との詳細な比較考証を行ったところ、スペンサーコレクションの絵巻物に描かれている「砂持ち」も、享和元年の日前宮の「砂持ち」であることが確認されるところとなった。

「日前宮砂持絵図」(縦16.1cm、横3,090.1cm)は31メートルに及ぶ一巻の絵巻物である。巻頭の前書きには次のように記されている。

「何国も同じ秋の夕暮れとはいひなから、爰に享和元年西三月上旬乃比、名草郡 日前宮道作りとて、瓦町の東より秋月村の入口迄道作り砂持有之、先大橋之東爪ニ、船ニて砂積ミ来ル事山の如シ、夫より町々の人々思々に、荷持、或ハ段尻、砂引車ニ而、笛、太鼓、三味線ニ離子立、男女中とはす砂持いたし候事、古今珍敷人数賑ふ事限り無シ、右三月六日に相初メ、来ル四月廿一日(ママ)ニハ道作り皆済、鉄納メとや、餅まき有之、余り珍敷事故、末代の人之咄ニも成ルへきとて、絵図ニて左之通り書留メ置而已」

この「前書き」の後に、30を超える町毎に出される約45ほどの台車や屋台が出し物として一つ一つ順に描かれている。各町の先頭の幟には町名が記され、出し物の名前なども書き込まれている。こうして「日前宮砂持絵図」は出し物の目録(カタログ)ともいふべき

ものになっているのであるが、後掲の表Ⅰは、「日前宮砂持絵図」に出し物として描かれているものを一覧表にしたものである。この「日前宮砂持絵図」にスペンサーコレクションの絵巻物に描かれた「砂持ち」の出し物とを照合させると、スペンサーコレクションの「砂持ち」に描かれている出し物の全てについて、ほぼそれぞれに対応するものを「日前宮砂持絵図」から抽出することができる。後掲の表Ⅱは、対応すると考えられる出し物を対照させたものである。大きな提灯を吊るした傘鉦屋台車（表Ⅱ①）、鯛を乗せた屋台車（表Ⅱ②）、神職装束の者達によって引かれる屋台車（表Ⅱ③）、帆に砂持丸と大書された宝船の屋台車（表Ⅱ④）は細部に相違は認められるものの見事な対応性が見られる。ただ、対応すると見られるものについてもかなり異なった描き方がなされている場合もある。例えば、スペンサーコレクションの絵巻物では屋台車はすべて四輪で描かれていたり、「日前宮砂持絵図」の屋台車にはない傘鉦が立てられていたり（表Ⅱ⑤）、あるいは「日前宮砂持絵図」の幾つかの屋台車の特徴的な要素を合わせ持つように描かれていたりということもある（表Ⅱ⑥）。しかし、描き手も違い、描かれた状況も異なるであろうということを考え合わせるならば、むしろその対応性は明瞭なものと言うことが出来る。毎年4月17日に行われる和歌祭とは違って、「砂持ち」が定期的に繰り返し行われるようなものではなかったことから、日前宮の「砂持ち」で繰り出された出し物は、文字通りに1回限りのものであったろうと考えられる。スペンサーコレクションの絵巻物に描かれた「砂持ち」の出し物と「日前宮砂持絵図」に描かれた出し物の対応性は、両者が同じ「砂持ち」を描いたことによるものと断定することを許すものであろう。

表Ⅲは、スペンサーコレクションの絵巻物に描かれた「砂持ち」と「日前宮砂持絵図」とを照合させて得られた「出し物の一覧表」である。この一覧表を元に、スペンサーコレクションで描かれている出し物を出した町の地域的分布を示したのが図Ⅳである。日前宮砂持絵図の出し物を出している町は、和歌川沿いから市堀川、真田堀川沿いに及んでいるが、スペンサーコレクションの絵巻物の「砂持ち」に描かれた出し物を出しているのは、その全てが大橋の両橋詰及びそれに隣接した町であり、近接した地域に集中していることが分かる。

ところで、「日前宮砂持絵図」は、制作過程からみると二つの部分から構成されているものと考えられる。一つは、「前書き」に続いて出し物が順次描かれている部分で、巻物の大部分を占めている。この部分は盛大な餅まきが行われた4月11日の「鉤納め」（竣工）の少し前に描かれたと思われ、実際に繰り出された出し物ではなくこれから出る予定のものが描かれたものと思われる。

この部分の末尾は、「来ル四月十一日鉤納メニより餅まき凡米式拾石計春候由、人々之噂ニ申候」と記し、「砂持世話人 東田中町 山家屋太郎兵衛」（下線は筆者）という名で締め括られている。これに対して、これに続く絵巻物の最後尾の部分は、大橋橋詰の砂上場と餅まきの場面が描かれ、はやし歌が書き留められており、その末尾は「元世話人 東田中町 山家屋太郎兵衛」（下線は筆者）で締め括られている。こうしたことから出し物に「前日に出る」とか「11日に出る」とかの書き込みがなされているのは、11日の鉤納めに出される予定のものと、実質的に道普請を終えなければならないその前日に出される予定のものを示したものであろうと考えられる。そこで「前日に出る」と書きこみがある9つの出し物について見ると、全て大橋の西橋詰か東橋詰から日前宮に至る道沿いの町のものであることが分かる（表Ⅲ）。この内5つはスペンサーコレクションの絵巻物の「砂持ち」にも描かれている。残りの4つについて見ても、その内の2つは描かれている可能性があり、更に残りの2つについてもそれぞれセットになっていたと考えられるもう一方の出し物（新式町目の鯛砂持屋台車と西紺屋町の行灯幟、表Ⅰ参照）がスペンサーコレクションの絵巻物に描かれている。スペンサーコレクションの絵巻物に描かれている全ての出し物に必ずしも「前日に出る」という書き込みがある訳ではなく、「11日に出る」とされているものも一つ（茶屋町の傘鉦屋台車）含まれてはいるが、先に述べたように必ずしも実際に出されたものだけが記録されたというのではなく、これから出される予定のものも描かれていたということも考えるならば、スペンサーコレクションの絵巻物に描かれている「砂持ち」は、餅まきが行われた11日の前日、即ち事実上の工事を完成させる4月10日に繰り出された出し物とそれを担った町衆たちの姿がその記念として描かれたものであるということは十分に考え得るところのものになっている。とすれば、一見すると、スペンサーコレクションの絵巻物に描かれている「砂持ち」は、「賑ふ事限り無シ」の「日前宮砂持ち」のある場面がたまたま無造作に取り上げられて、即興的に描かれたものであるかのように見えるものの、その実のところは、しるべきものがしるべき仕方では描き込まれていたものであるというようにも考えられるのである。

スペンサーコレクションの絵巻物の「砂持ち」の背景の景観についても、考証してみると、砂持ちで普請された道から南面した場合に展開するであろうと考えられる景観が忠実に描かれていることが分かる。図Ⅴは、明治19年（1886年）の測量に基づく地形図（『明治前期関西地形図』柏書房 1989年「和歌山」）であるが、これを手掛りにすると、砂持ちが描かれたであろうと思われるところから南に展開する大パノラマには、遠景に名草山や福飯ヶ峰などの山容に特徴のある山が見

え、近景から中景には広々と田園が展開しており、その田園の中に有家村や津秦村の集落が収まっていたであろうことが窺える。絵巻物が描かれた享和元年(1801年)当時もほぼ同じようなパノラマ景観が広がっていたものと考えられるが、スペンサーコレクションの絵巻物の「砂持ち」の背景に描かれている景観はまさし

に隣接する新興商業地域に集住するものとして、それぞれに競い合いながらも生業上の関係や血縁関係、地縁的關係で結ばれていたものと思われる。大橋橋詰に隣接した北細工町(広瀬)に在住し「餅搗き踊り」を再興した若山青霞堂(7代目伊兵衛:高市志友)こそは、城下きっての文化人にして書肆として頭角を現し

3. 現在も販売されているかどうかは、不明である。
4. 私がスペンサーコレクションの絵巻物の存在を知ることになったのは、Kazuko Morohashi氏の修士論文の翻訳を和歌祭の関係者から依頼されたことによる。この絵巻物については、私がある存在を知る以前にすでに和歌山の和歌祭研究者の間ではそれなりに知られてはいたものの、研究の対象にされたことはないようで、Kazuko Morohashi氏の修士論文が、この絵巻物に関する恐らくは最初の研究であろう。Kazuko Morohashi氏の修士論文における絵画史研究の結論は、和歌祭を描いたものであることを前提に、この絵巻物の制作年代を1865年としている。
5. 三尾功氏の論文（文献：三尾功2003年A、2003年B）には、該博な知識に裏づけされた論考として学ぶところが多くあるが、スペンサーコレクションの絵巻物に関しては後半の「砂持ち」をも和歌祭の練り物として描かれたとする前提をもとに論が築きあげられており、「その格別な風流ぶりが伝えられる享保5年（1720年）の鷲森御坊再建時における砂持が和歌御祭礼渡御に参加した状景を描いた図とみるのが妥当であろう」（文献：三尾功2003年B、85頁）とする結論が導き出されることになっている。
6. 本稿で引用に際して元にした『紀伊国名所図会』は、1996年に復刻刊行された『紀伊国名所図会』（初・二編）である。

〔文献〕

Morohashi, Kazuko 2001: An Analysis of the Wakanoura Gosairei Mochi Tsuki Odori no Zukan From the

New York Public Library Spencer Collection.

三尾 功 2003年A: 「絵画資料に見る和歌祭（一）—「和歌御祭礼渡り物之内餅搗踊之図」の周辺—」『和歌山 地方史研究』和歌山地方史研究会 45 32～44頁 所収。

三尾 功 2003年B: 「絵画資料に見る和歌祭（二）—「和歌御祭礼渡り物之内餅搗踊之図」の周辺—」『和歌山 地方史研究』和歌山地方史研究会 46 81～88頁 所収。

Rousmaniere, Nicole Coolidge ed. 2002: *Kazari Decoration and Display in Japan 15th—19th Centuries* The British Museum Press & Japan Society.

塩川京子 1996年: 『絵のなかの暮らし』岩波書店（近代日本の美術7）。

反町茂雄編 1978年: 『スペンサーコレクション蔵 日本絵入本及絵本目録—昭和53年増補改訂版—』（Catalogue of Illustrated Books and Manuscripts in the Spencer Collection of New York Public Library）弘文荘。

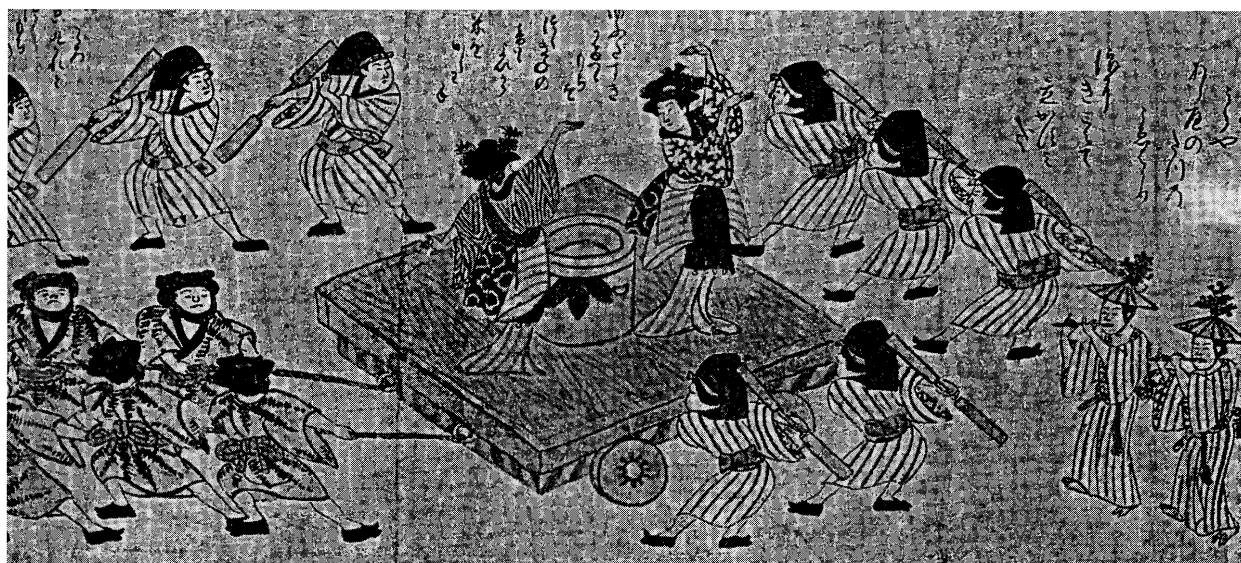
須山高明・高橋克伸 1996年: 「解説」『紀伊国名所図会』臨川書店（版本地誌体系）569～579頁 所収。

高橋 修 1990年: 「紀州東照宮の創建と和歌浦」『特別展図録 紀州東照宮の歴史』編集発行和歌山県立博物館 59～89頁 所収。

高橋克伸 1996年: 「城下和歌山における二つの祭礼について—和歌祭礼次第書と日前宮砂持絵図を比較して—」『研究紀要』和歌山県立博物館 創刊号 68～70頁 所収。

高市志友他 1996年: 『紀伊国名所図会』（初・二編）臨川書店版本地誌大系9。

図Ⅰ：スペンサーコレクションの絵巻物の前半部に描かれた「餅搗き踊り」(部分)



出所：反町茂雄編 1978年：『スペンサーコレクション蔵 日本絵入本及絵本目録—昭和53年増補改訂版—』(Catalogue of Illustrated Books and Manuscripts in the Spencer Collection of New York Public Library) 弘文荘 61頁

図Ⅱ：スペンサーコレクションの絵巻物の後半部に描かれた「砂持ち」(部分)



出所：Rousmaniere, Nicole Coolidge ed. 2002: *Kazari Decoration and Display in Japan 15th-19th Centuries* The British Museum Press & Japan Society 294~295pp.

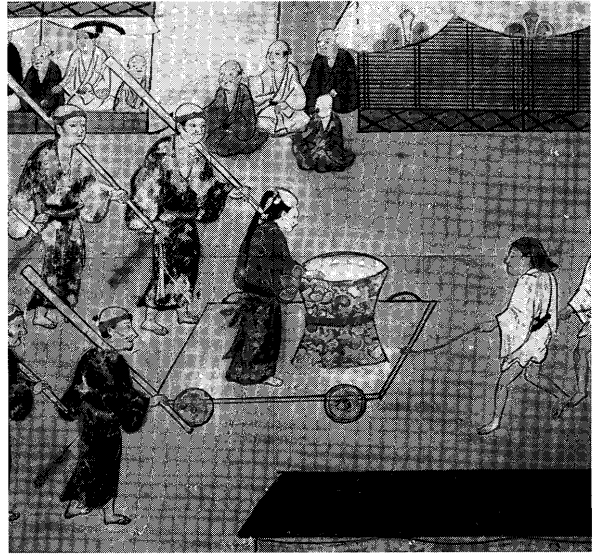
図Ⅲ：「餅搗き踊り」の比較

東照宮縁起絵巻



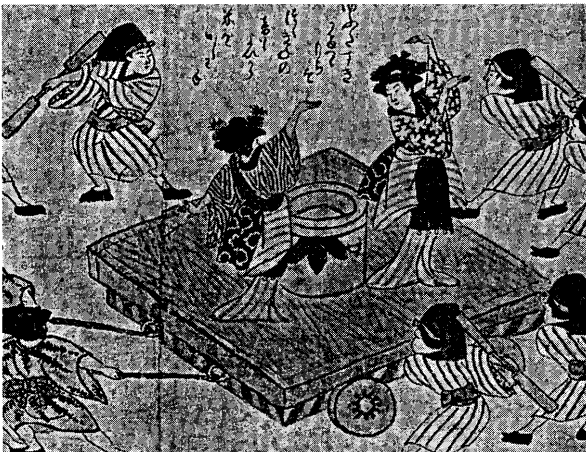
出所：「和歌祭 絵葉書」 和歌の浦アート展実行委員会制作
2002年

海善寺屏風絵



出所：『祭礼・山車・風流—近世都市祭礼の文化史—』 四日市市立博物館 1995年 58頁

スペンサーコレクションの絵巻物



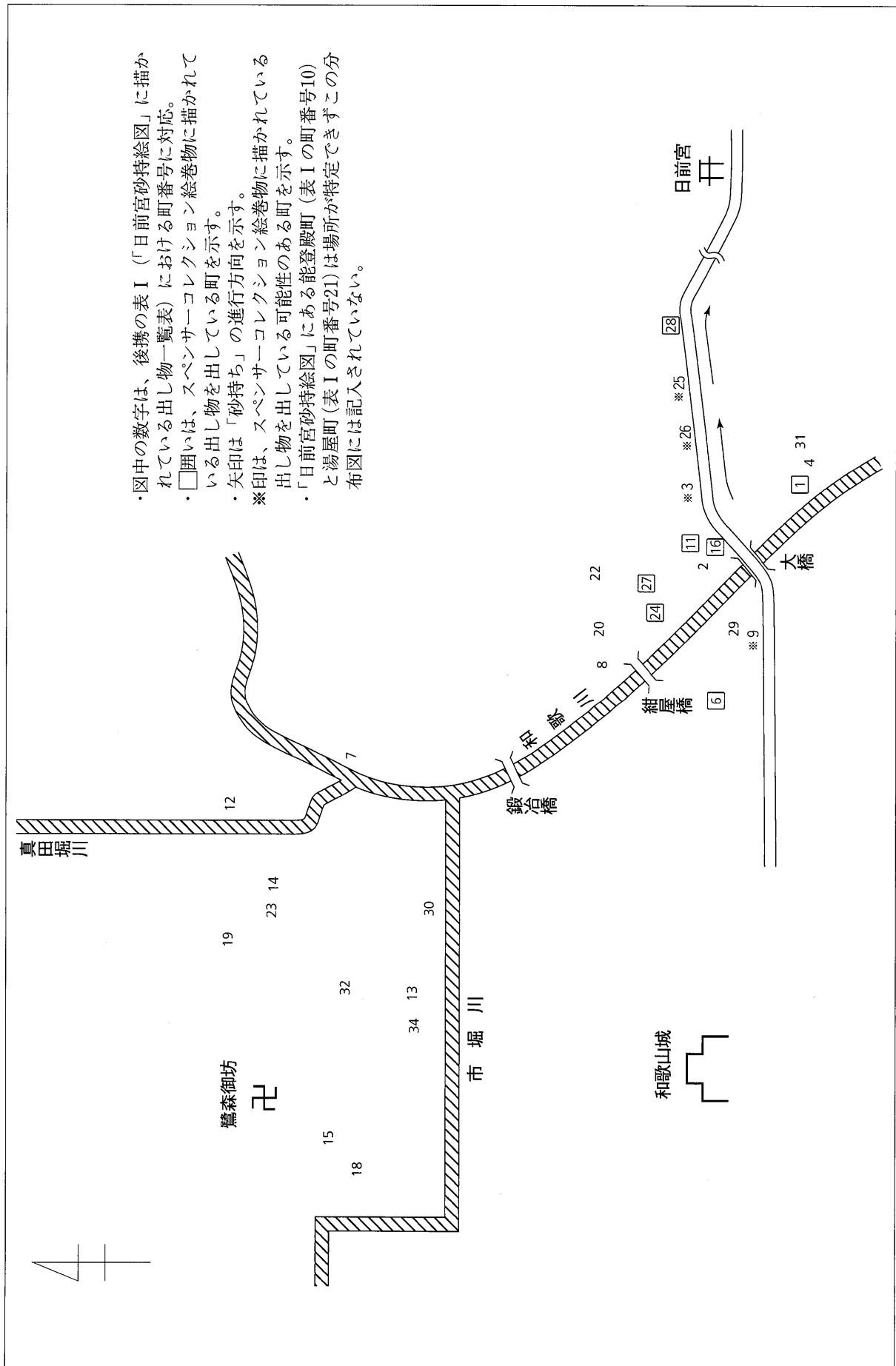
出所：図Ⅰの部分

『紀伊国名所図絵』



出所：『紀伊国名所図会』
(初・二編) 高市志友 他
臨川書店 版本地誌大系
9. 1996年

図IV：スペンサーコレクションの絵巻物の「砂持ち」に出し物を出している町の分布図



図V：「砂持ち」で普請された道と南面の地形(※)



※地形図の出所は、『明治前期関西地形図』（柏書房1989年）。

図VI：スペンサーコレクションの絵巻物の背景に描かれた景観（図IIの部分）

中央の三角形の山は福飯ヶ峰であろう。その右に描かれているのは遠くの長峰山脈であろうか。三角形の山の手前には、前面に広がるのは水田の中に集落と一際高い叢林が描かれている。集落は有家村で叢林は、津秦天満宮の杜叢林であろう。

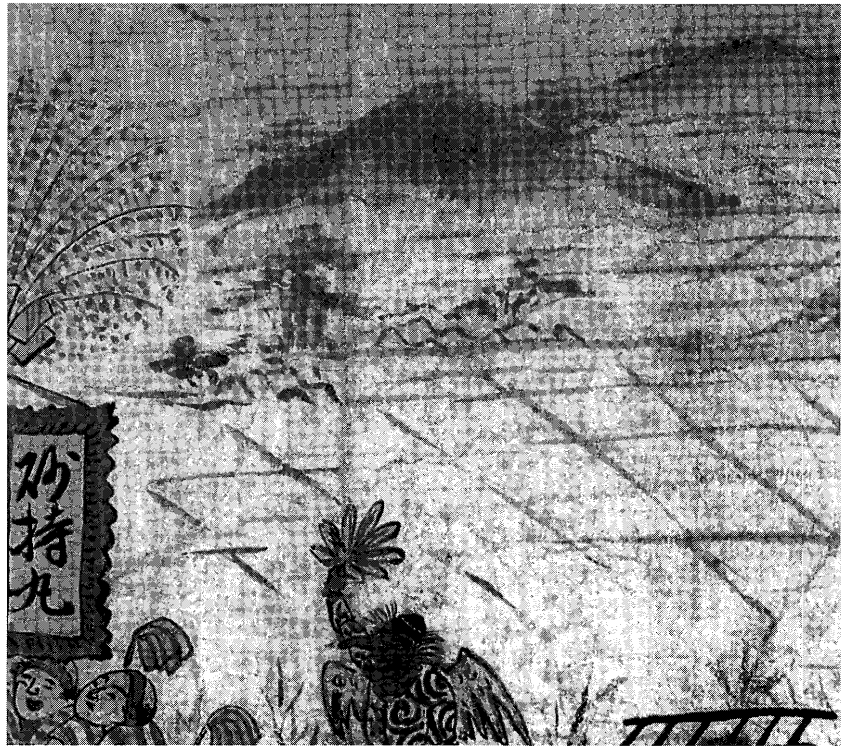
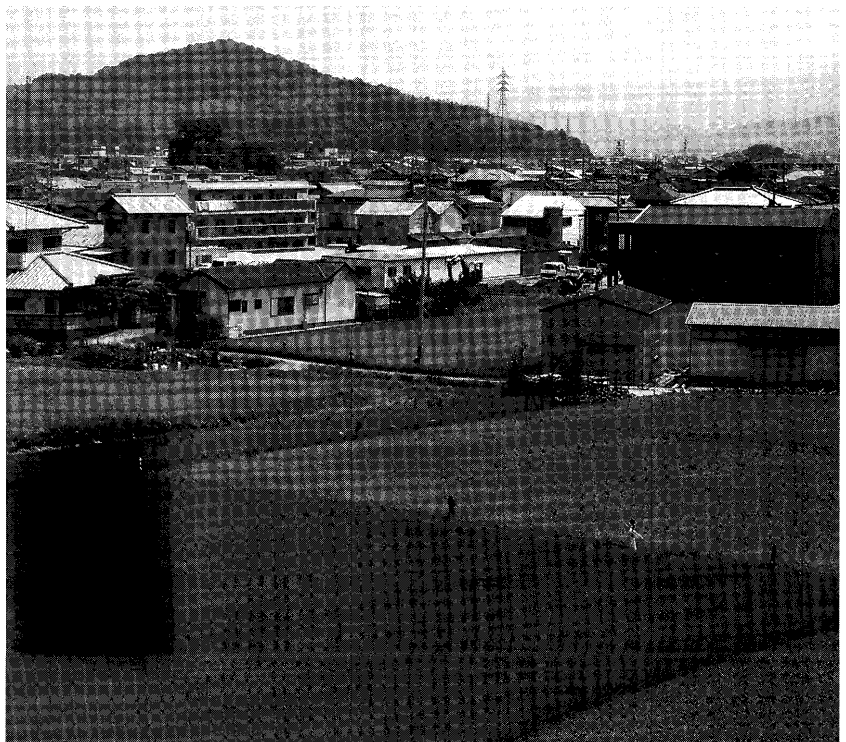


写真 I：日前宮近くの県道と歌山野上線道路沿（太田23）から福飯ヶ峰方面の景観（2004年8月25日撮影）

図VIと近似した景観構成になっている。三角形の山は福飯ヶ峰である。写真でははっきりとは写っていないがその右側にはるか遠くの長峰山脈である。すぐ手前の叢林は津秦天満宮の杜叢林である。写真では見えないが、その右側には有家の住宅地が広がっている。前面に広がっているのは、言うまでもなく水田である。



表Ⅰ：「日前宮砂持絵図」に描かれている出し物一覧表

町番号 町名 〔古町・新町別〕	出 し 物					備 考
	番号	山 車	山車を出すと されている日	練 物	幟	
1.新富町〔新町〕	1-1			神子		着色
	1-2	神鏡屋台車	前日			一部着色
	1-3			幣帛		着色
	1-4	御家方台車	11日			「同新留町より出」と記載
	1-5			摺鉦		1-4と一体
	1-6			太鼓		1-4と一体
2.新通老丁目〔新町〕	2-1			小鼓		着色
	2-2				笠幟2本	着色
	2-3	船形屋台車				着色
3.西田中町〔新町〕	3-1			紙垂振		着色
	3-2	太鼓屋台				「砂持初ニ出す」と記載
4.南一里山町〔新町〕	4-1	太鼓屋台				着色
	4-2	狸々屋台車	11日			着色
5.南新内〔新町〕	5-1	相撲屋台車				着色
	5-2	囃子屋台				着色
6.西紺屋町〔古町(広瀬)〕	6-1				幟1本 行灯幟4本	前髪(持ち手)
	6-2	御所車屋台	前日、11日			6-1とセットになっていたと思われる
7.新才賀町〔新町〕	7-1	船形屋台車				「新通七丁目せんば」と記載
8.新通三丁目〔新町〕	8-1				唐人	「新通三丁目せんば」(幟)
	8-2	松木屋台車				「新通三丁目せんば」と記載
	8-3	砂持車				「新通三丁目せんば」と記載
9.広瀬八百屋町〔古町(広瀬)〕	9-1				唐人	着色
	9-2			狐、唐人		9-3の引手
	9-3	鶴笠鉦龍船車				着色
10.能登殿町〔*〕	10-1	砂籠屋台車				「能登町」(旗)
11.茶屋町〔新町〕	11-1	植木屋台車	前日			一部着色
	11-2	笠鉦屋台車	11日			大提灯2
12.北新四丁目〔新町〕	12-1	砂持車				一部着色
13.万町〔古町(内町)〕	13-1			鬼面摺鉦		着色
	13-2			太鼓(小)		着色
	13-3	砂籠屋台車				着色
14.住吉町〔古町(内町)〕	14-1	船形屋台車				「住吉大明神」(幟)
15.九家ノ丁〔古町(内町)〕	15-1	船形屋台車				「杭貳百本」と記載
16.橋向町〔新町〕	16-1				頭巾装束	着色
	16-2			花笠・頭巾・紙垂振		16-3の引手
	16-3	櫓屋台車				長提灯2
17.松平金屋中	17-1	塩釜屋台車				一部着色
18.船大工町〔古町(内町)〕	18-1	船形屋台車				「金千両」(祝袋)
19.本町五丁目〔古町(内町)〕	19-1	砂持屋台車				一部着色
20.新中通二丁目〔新町〕	20-1	砂持屋台車				
21.湯屋町〔*〕	21-1	幣砂持屋台車				一部着色
22.柳町〔新町〕	22-1	砂持屋台車				一部着色
23.桶屋町〔古町(内町)〕	23-1	桶砂持屋台車				
24.新貳町目〔新町〕〔**〕	24-1			牛		24-2の引手の先頭
	24-2	花砂持屋台車	前日			
	24-3	鯛砂持屋台車	前日			24-1、24-2とセットになっていたと思われる
	24-4	砂持屋台車	11日			
25.西瓦町〔新町〕	25-1	笠鉦屋台車	前日			「天下太平」の文字
	25-2	砂持屋台車	11日			「砂」(提灯)「十一日銀納ニ出る」と記載
26.東田中町〔新町〕	26-1	笠鉦屋台車	前日			「天下太平」の文字
	26-2	砂持屋台車	11日			
27.新中通巷丁目〔新町〕	27-1	白鳩屋台車	前日			
	27-2	家形屋台車	11日			「中通巷丁目」と記載
28.東瓦町〔新町〕	28-1	船形屋台車	前日、11日			「砂持丸」(幟)
29.薬師町〔古町(広瀬)〕	29-1	鉦立屋台車				一部着色
	29-2			棒振		
	29-3			竹馬乗神主・立笠		
30.米屋町〔古町(内町)〕	30-1	船形屋台車				「此舟葺作」と記載
31.裏町〔新地〕	31-1			毘持ちと狐		
	31-2	船形屋台車				
32.内大工町〔古町(内町)〕	32-1	砂持車5台				
33.日前宮参詣之人々	33-1			(もっこ運び)		「日前宮参詣之人々砂持てい」と記載
34.西ノ棚〔古町(内町)〕	34-1			馬		
	34-2			(もっこ運び)		
35.町馬屋中	35-1			(馬の籠)		「町馬屋中砂持」(幟)
36.北鳴村	36-1			(もっこ運び)		「北鳴村切芝持」(幟)

*位置の確認出来ない町である。

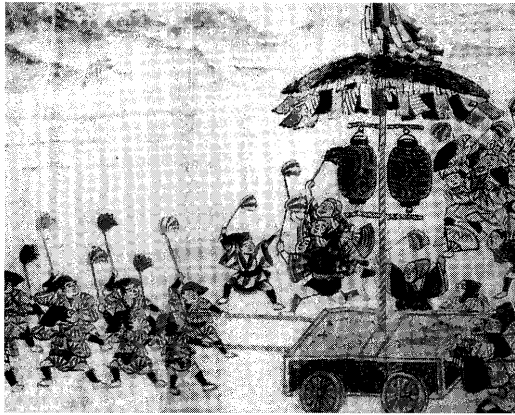
**「新貳町目」とあるが、「新通貳町目」の誤記であろう。

※記：この一覧の作成にあたっては、高橋克伸氏の読み下しを基礎とした。

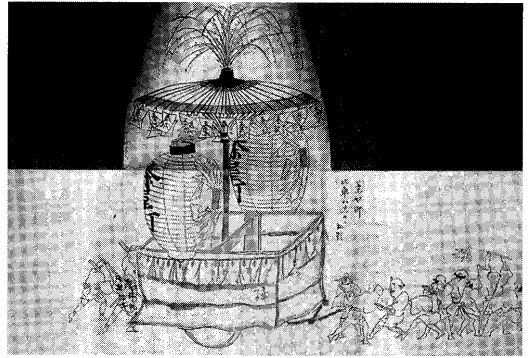
表II：スペンサーコレクションの絵巻物に描かれた出し物*と「日前宮砂持絵図」に描かれた出し物の対照表

1

a



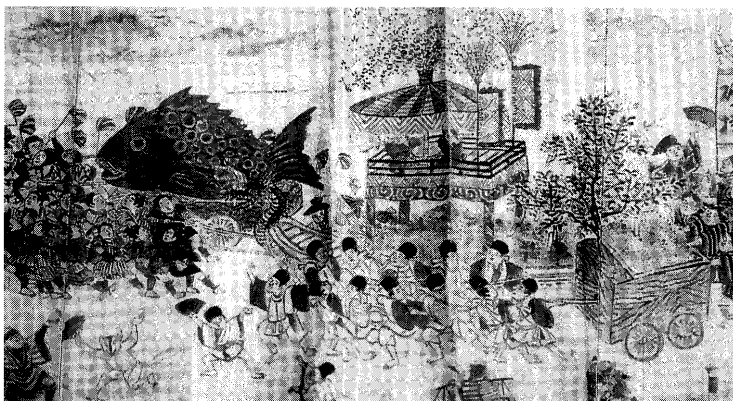
b



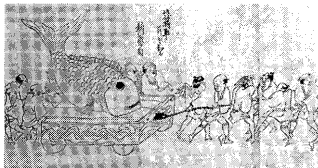
スペンサーコレクションの絵巻物では「砂持ち」行列の先頭に描かれているのが、aである。これに対応すると見られるのが、bで茶屋町から出されている。aでは屋台車は四輪で描かれているが、bでは二輪である点などは異なっているが、大きな提灯を付けているところなど対応したものと見て間違いないであろう。尚、スペンサーコレクションの絵巻物では屋台車は全て四輪で描かれている。

2

a



b



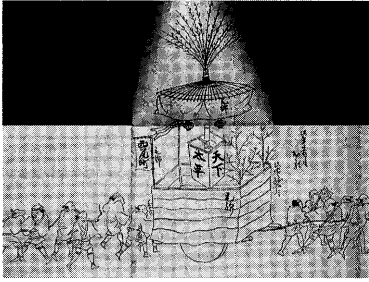
c



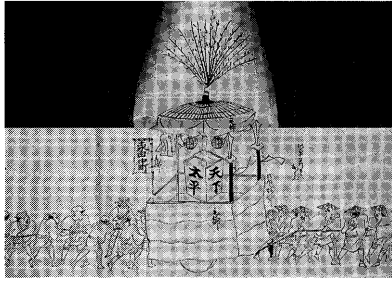
スペンサーコレクションの絵巻物の鯛の出し物 (aの中央右) には、「日前宮砂持絵図」の新式町目 (新通式丁目のことであろう) のやはり鯛の出し物bが対応している。aの右端に見える神職に引かれた屋台車には、「日前宮砂持絵図」では新富町から出されている神鏡屋台車cが対応するであろう。

問題は、aの中央の屋台車で、これに対応すると思われる候補が4つも存在する。d、e、f、gがそれらである。d (西田中町) とe (東田中町) は、非常に似通った屋台車であるが、傘鉾が立てられているなど全体的な形状の点での対応関係がみ

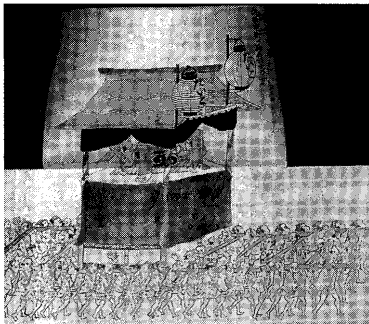
d



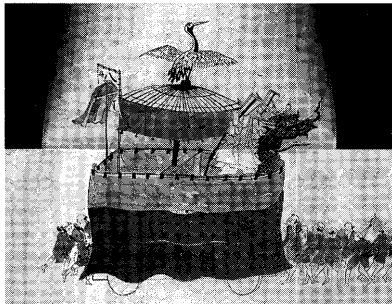
e



f



g

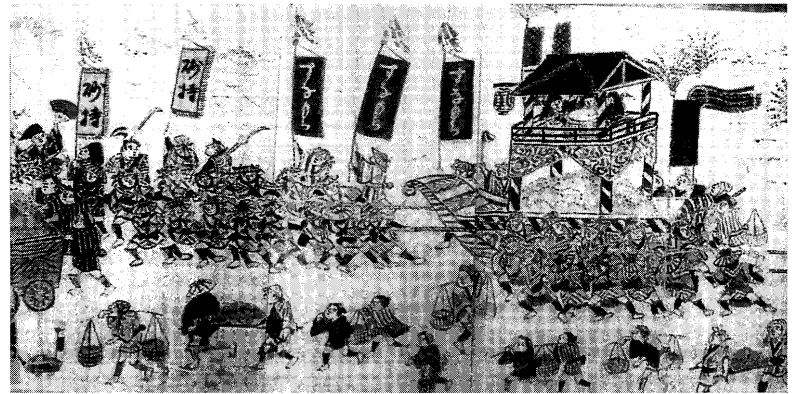


られる。f (西田中町) は屋台の上で太鼓を打っている点での対応がみられる。aの中央の屋台車にはよく見ると舟形屋台車に乗っており、龍首が付けられているが、一種の舟形屋台車と考えられるg (広瀬八百屋町) にも同じような龍首が付けられている。d、e、f、gの4つの出し物を出している西瓦町、東田中町、西田中町、広瀬八百屋町は、全てかつての大手筋から大橋を通過して日前宮に向かう通りの町である。aの中央の屋台車には、意図的にd、e、f、gの4つの屋台車の特徴が描きこまれているということも考えられる。

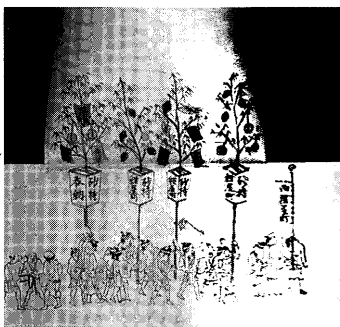
3

スペンサーコレクションの絵巻物には、「砂持」と書かれた2本と「すなもち」と書かれた3本の計5本の幟が描かれているが (aの上部右から中央)、「日前宮砂持絵図」でこれに該当するのは広瀬の西紺屋町からだされている「砂持」と書かれた行灯幟bであろう。aの右側の屋台車は、大きな舟形屋台車に櫓屋台が乗っているようになっているが、これに対応しているのは「日前宮砂持絵図」では橋向町の櫓屋台車cであると思われる。

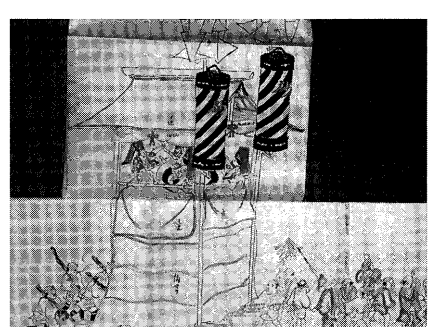
a



b



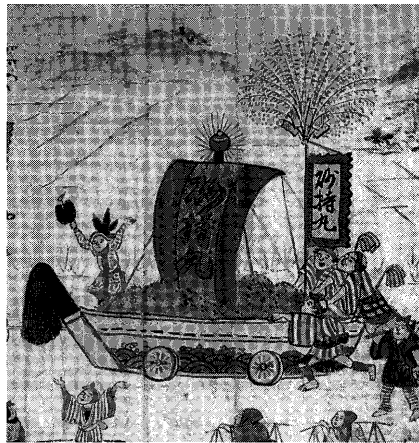
c



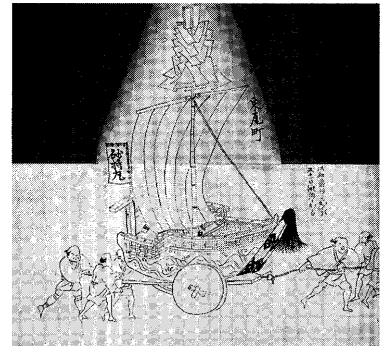
4

帆に「砂持丸」と大書された宝船aは、スペンサーコレクションの絵巻物に描かれた出し物の中でも目に飛び込んでくるものであるが、これには、東瓦町の「砂持丸」と書かれた幟をかざした船形屋台車bが対応している。

a



b

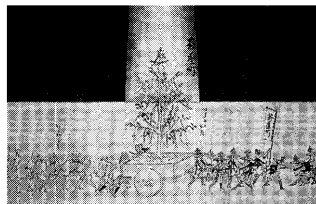


5

a



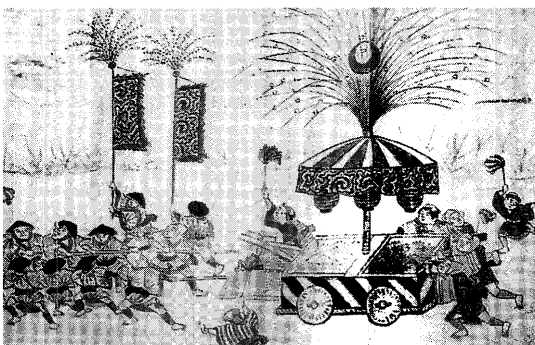
b



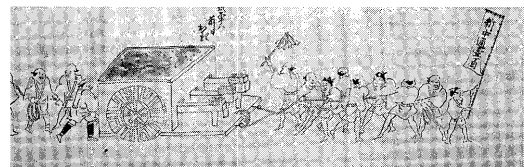
スペンサーコレクションの絵巻物には植木に沢山の色紙を飾り付けた屋台車aがあるが、これに対応すると思われるのは、「日前宮砂持絵図」では茶屋町の植木屋台車bと思われる。ただ、aは桶の台車に木が植えられており、「日前宮砂持絵図」には、真田堀近くの桶屋町(古町)から出された桶屋台車が描かれている。この台車の要素もaには見られる。

6

a



b



スペンサーコレクションの絵巻物では、砂持ち行列の最後尾に白搦き屋台車aが描かれている。「日前宮砂持絵図」にも新中通一丁目から出されている白搦屋台車bがある。スペンサーコレクションaには立派な傘鉾を立てられているが、両者を対応するものと見て間違いのないであろう。

※スペンサーコレクション絵巻物に描かれた出し物の図の出所は、Morohashi, Kazuko 2001。

表Ⅲ：スペンサーコレクションの絵巻物に描かれている出し物に対応する「日前宮砂持絵図」の出し物

スペンサーコレクション絵図			日前宮砂持絵図(1801年)				
番号	山車(出し物)	備 考	出し物		町番号 町名 〔古町・新町別〕	山車を出すと されている日	備考
			表Ⅰの 番 号	山車(出し物)			
①	笠提灯台車	頭巾(引手)	11-2	笠鉾屋台車	11.茶屋町 〔新町〕	11日	
②	鯛台車	頬被(引手)	24-3	鯛砂持屋台車	24.新貳町目 〔新町〕	前日	
※ ③	笠櫓太鼓 龍舟台車	前髪(引手)	3-1	太鼓屋台	3.西田中町 〔新町〕		頬被、鉾巻(担ぎ手) 「砂持初二出す」と記載
			9-3	鶴笠鉾龍船	9.広瀬八百屋町 〔古町(広瀬)〕		狐、唐人(引手)
			25-1	笠鉾屋台車	25.西瓦町 〔新町〕	前日	「天下太平」(屋台)
			26-1	笠鉾屋台車	26.東田中町 〔新町〕	前日	「砂」(引手の編笠、法被) 「天下太平」(屋台)
④	植木短冊台車	神職装束 (引手)	1-2	神鏡屋台車	1.新富町 〔新町〕	前日	神職装束(引手) 「此櫓ハ前日出」と記載
⑤	砂持幟5本	編笠(持ち手)	6-1	幟1本 行灯幟4本	6.西紺屋町 〔古町(広瀬)〕		前髪(持ち手)
⑥	櫓太鼓舟屋台車	編笠(引手)	16-3	櫓屋台車	16.橋向町 〔新町〕		花笠、頭巾、櫓、わらじ(引手)、紙垂振 「砂」(提灯)太鼓(屋台)
⑦	帆掛舟台車	「砂持丸」(帆) 編笠(引手)	28-1	船形屋台車	28.東瓦町 〔新町〕	前日、11日	「砂持丸」(幟)
※※ ⑧	植木色紙桶台車	「砂」(引手の 編笠法被) 足袋(引手)	11-1	植木屋台車	11.茶屋町 〔新町〕	前日	花笠、赤櫓、脚半、わらじ (引手)
⑨	笠白搗台車	塗笠・脚半 (引手)	27-1	白搗屋台車	27.新中通老丁目 〔新町〕	前日	

※③に対応するものについては、4つのものの要素が入り混り、1つに特定できていない。

※※⑧に対応するものについては、表Ⅰの「出し物番号23-1」も考えられるが、これのみが大橋橋詰から遠く離れた古町であり、表Ⅰの「出し物番号11-1」とした。より詳細な検討は後日を期したい。